

保育者に求められる音楽力を培う連携を目指して  
—現場と養成校・協働研修の意義と成果—

○三宅 浩子(宮崎学園短期大学) 早川 純子(南九州大学) 井上 浩義(宮崎学園短期大学)  
中池 順子(第一幼児教育短期大学) 中村 佳代子(第一幼児教育短期大学)

要旨：保育現場と保育者養成校の「音楽」をめぐる考えや取り組みを相互に理解し、「保育者に求める音楽力」の育成について双方が考えを深めることを目的として、協働研修を行った。研修は、現場と養成校がそれぞれに取り組みや課題等についてプレゼンテーションを行った後に、アクティブラーニングスタイルのセッションを行い「保育者に求める音楽力」を協働で考察した。その結果、保育現場では養成校で培われた音楽力を基に音楽活動が展開され、養成校は保育現場で活かされることを前提とした音楽指導を行っていることが確認され、養成校から現場へと繋がる音楽力育成の道筋を明らかにした。研修の過程では、現場が求める①ピアノ技術の習得、②季節の歌・わらべうた・手遊び等の実践力は各養成校が重点的に取り組んでいる内容であるにも関わらず、これらの力が卒業時に十分に確保されていない現状も示唆された。音楽力の育成が年々困難になっている実態は、両者のプレゼンテーションにより共有されたと思われる。保育者の音楽力の確保と向上という課題を共に理解しながら、現場と養成校が連携し、音楽力を備えた魅力的な保育者育成に臨んで行く契機となる研修であった。

キーワード：保育、音楽力、保育現場と保育者養成校、協働、連携

---

Coordination of Designing Musical Competency Required for a Nursery Teacher:  
Signification and Results of Collaborated Seminar between Nursery School and  
Training Institution

Hiroko MIYAKE(MIYAZAKI GAKUEN JUNIOR COLLEGE) Junko HAYAKAWA(MINAMI KYUSHU  
UNIVERSITY) Hiroyoshi INOUE(MIYAZAKI GAKUEN JUNIOR COLLEGE)  
Junko NAKAIKE(DAIICHI GUNIOR COLLEGE FOR INFANT EDUCATION) Kayoko  
NAKAMURA(DAIICHI GUNIOR COLLEGE FOR INFANT EDUCATION)

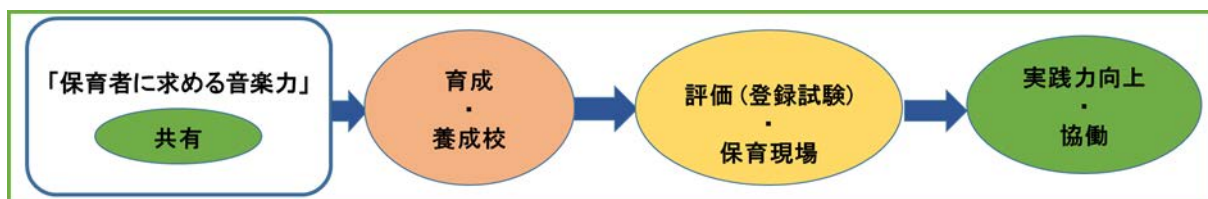
**abstract** : Nursery schools and training institutions in Miyakonojo area held a collaborated seminar for mutual understanding of how we conceive “music” and our musical activities, deepening also the understanding of nurturing “musical competency required for a nursery teacher”. The seminar consists of presentations concerning their musical activities as well as accompanied problems, and participative session as a style of active learning on the theme of “musical competency required for a nursery teacher”. We argued that musical activities in nursery schools are based on musical competency learned at training institutions, and hence the path of nurturing musical competency are connected and linked between institutions and nursery schools. Through the discussion, some of the problems are pointed out. One of them is that at the point of graduating the institution they have not yet completely mastered musical skills such as ①skills of piano performance, and ②repertoires of seasonal song, traditional children’s song, and song using hand-gestures. We both became aware of the fact that nurturing musical competency is getting difficult year by year. The seminar was meaningful in terms of sharing our present circumstances and various ideas as well as establishing a new relationship for the sake of nurturing attractive nursery teachers with necessary musical competency.

## はじめに

宮崎県・鹿児島県では、県内の私立幼稚園・認定子ども園等に就職を希望する学生に対して、各県の私立幼稚園協会・連合が登録試験を実施している。この試験は、両県ともに県内に有能な人材を確保し保育・教育の充実と幼稚園教諭等の質の向上を図ることを目的として実施されている。各園は、登録試験と園の採用試験結果を総合的に評価して、採用の可否を決める。本研究チームメンバーが所属する各養成校の学生の殆どは、この幼稚園教諭登録試験を受験して地元就職する。また宮崎県には、同様の目的で保育士登録試験を実施している(法人立保育園・認定こども園園長会主催)地域がある。登録試験の主催団体に所属している園に就職を希望する場合、学生はこの登録試験を受験することになる。登録試験にはピアノ実技試験が課されているが、近年は、登録試験の課題曲を弾けるレベルにまで到達できず、ピアノ実技試験の受験が困難になる学生も見られるようになってきた。

「保育者に求められる音楽力」は、保育現場と保育者養成校に共通に理解され、養成校の音楽課程はその育成を、現場はこれを評価する役割を担っている。さらに現場は、採用した学生を保育者として育てていく過程で、保育の場により相応しい音楽力の向上を期待するであろう。また養成校は、現任者に対して「実践力向上」や「学びなおし」の場を地域に開き、保育者のさらなる質向上に貢献するという役割をも担っている【図1】。しかし、保育者を目指す学生の質は年々変化している現状にあり、現場と養成校の音楽力育成の繋がりにも、課題が生じている可能性も懸念される今日である。

【図1】



## 1. 問題と目的

「保育者に求められる音楽力」とその育成方法については、これまでも多く議論されてきた<sup>1 2 3 他</sup>。初心者を多く含む集団に対して、ピアノ技術を習得させ、弾き歌いのレパートリーを持たせ、その技術やレパートリーを総合的に現場で活用する力を、短期間で育成する方法の検討は、今もなお、音楽指導の課題であり続けている。

ピアノの演奏技術をはじめとする「保育者に求められる音楽力」育成に関する研究においては、専門的立場からの検討もさることながら、保育現場が求める音楽力や実践、指針や要領の尊重は欠くことができない。保育者を目指す学生に対する音楽指導を検討した先行研究では、現場の実践や音楽観を把握する手段としてアンケート調査を行う方法がよく用いられてきた<sup>4 5 6</sup>。しかし、保育の場から切り取られた調査項目の集計では、現場の実践や音楽観を、保育を取り巻く様々な背景と共に理解することは、困難である。そこで本研究は、現場が考える「保育者に求められる音楽力」を保育の全体性と共に理解するために、現場職員と養成校音楽教員のアクティブラーニング型協働研修により得られた質的データを活用する。そして、「保育者に相応しい音楽力」の育成は、養成校から現場へと繋がり、総合的な保育力の向上と共に伸びていくものであることを認識し、保育現場と養成校の「音楽」をめぐる考えや取り組みを相互に理解し、双方が「保育者に求める音楽力」育成について考えを深めることを本研究の目的とする。

## 2. 研究の方法

### 2-1 協働研修の参加者

保育現場からは、保育士登録試験実施団体の音楽担当職員 3 名と地域の保育者養成機関(短大 2 校、4 年制大学 1 校)から 5 名(内、1 名は研修のファシリテーターを務めた)が参加した。

### 2-2 協働研修の進め方

協働研修は、各現場と養成校が「音楽」をめぐるそれぞれの取り組みに付いてプレゼンテーションを行うプレセッションと、各参加者がブレインストーミング方式で各取り組みや考え等交換し合うメインセッションの 2 部構成で進めた。

プレセッションでは、保育現場は、予め依頼しておいたテーマ(①保育者に求める音楽力について、②登録試験について、③音楽表現活動と課題について)を含む内容でプレゼンテーションを行い、養成校は、音楽関連科目とその授業概要や授業内容についてプレゼンテーションを行った。

メインセッションでは、現場と養成校混合メンバーで構成する 2 グループに分かれ、ブレインストーミングならびに KJ 法の手順に従い、3 つのセッションからなるグループディスカッションを行った。セッション①では「子どもにさせたい音楽体験」について、それぞれの意見を付箋に書き出し、一人ずつ説明を加えながらホワイトボードシートに付箋を貼り付けた。その後、張り出された付箋をグループ化して見出しをつけた。セッション②では、セッション①でグループ化した内容を実践するために「保育者に求められる力」について、同様の手法で意見を出し合いグループ化した。最後にセッション③では、「保育者に求められる音楽力を培う連携」を考えるためにその過程を視覚化することを目的に、セッション②で出された「求められる力」が培われる過程を模造紙に貼りだした。

### 2-3 分析の方法

#### 2-3-1 収集したデータ

○プレセッション 逐語録、記述メモ、プレゼンテーションの資料、プレゼンテーションの資料をさらに要約したもの(養成校のみ)

○メインセッション 付箋が貼り出された模造紙やホワイトボードシート

#### 2-3-2 分析の方法

##### a. 保育現場から

逐語録を意味の単位で区切り、音声の欠損等を記述による記録と資料で補い、要約レベルの概念化を行った。そして、抽出された概念に上位概念を貼り付けて図式化してまとめた。

##### b. 養成校から

指導内容と形態については、口頭発表の資料を一覧にまとめたものと、各養成校が課題とすることを簡潔に記述して、研修後に提出した。提出された資料の抽象度を上げて問題提起を行った。

##### c. メインセッション

各セッションで得られたデータを概念化、図式化してその関係性を明らかにした。

### 3. 結果

#### 3-1 プレセッション

##### 3-1-1 保育現場から

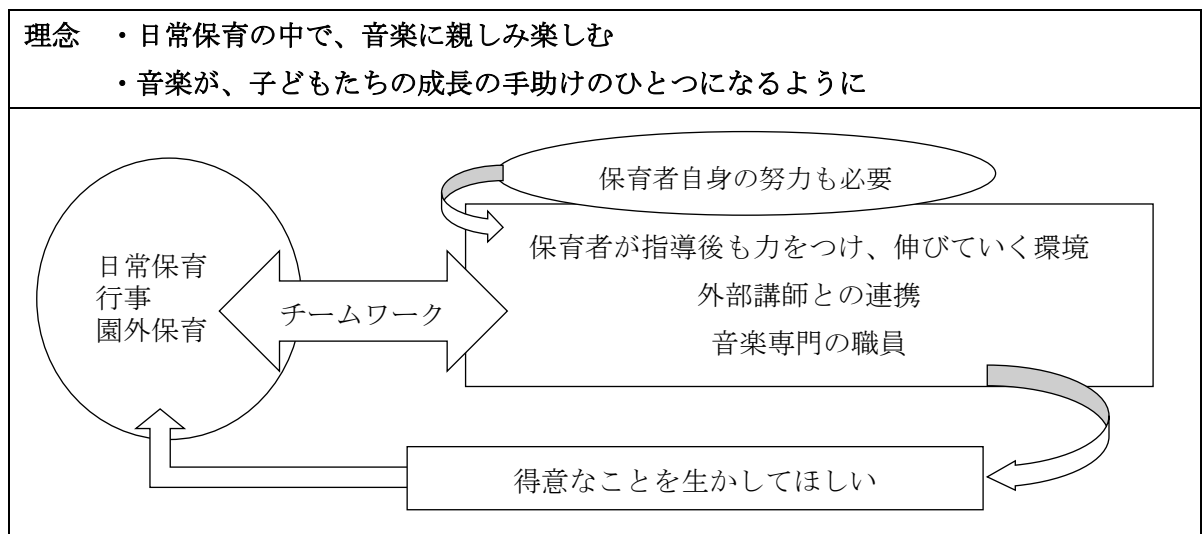
保育現場からの参加者のうちの1名が司会進行を務め、あとの3名が司会者のインタビューに答えるスタイルで進められた。口頭発表の記録と提出された資料を整理し、(1)保育者に求める音楽力 (2)保育における音楽表現活動、各園の取り組み (3)登録試験について (4)課題 (5)養成校の音楽教育に求められること の5つのテーマで結果を記す。

##### 3-1-1-1 音楽表現活動と保育者に求める音楽力

最初に、(1)保育者に求める音楽力について、(2)保育における音楽表現活動・各園の取り組みについて、保育現場からの報告を概念化したもの【文末資料1】を図式化【図2】して、以下に説明する。

各園とも日常保育、行事、園外保育等、いろいろな場面に音楽表現活動が導入されており、保育士が中心となって指導したり、外部講師や音楽専任職員との連携により指導されていることが、各園の保育理念と共に報告された。保育者に求められる音楽力については、高度なピアノ技術よりも、養成校で学んできたことや、できることを少しでも保育に生かそうとする取り組みの姿勢や工夫等が求められた。また、ピアノが苦手であっても、上達のための努力は必要であるため、就職後にも力を伸ばしたり、レパートリーを増やしたりできるような園サイドからのサポート体制なども紹介された。

【図2】



##### 3-1-1-2 登録試験「ピアノ」実技試験について

逐語録と記述メモ、研修資料をもとに分析した結果、報告内容は以下4項目に整理された。

- ①試験課題 《平成30年度 都城市・三股町 保育士登録試験実施案内》より  
バイエル 80～100(83、84、86、92を除く)から当日1曲指定、指定した童謡2曲から当日1曲指定。(2018年度は「おかあさん」「アイアイ」)  
※バイエルの指定ナンバーは、全音楽譜出版社「標準版バイエル」・音楽之友社の「標準バイエル」のナンバーを指していると思われるが、実施案内に明示されてい

い。また、童謡は「弾き歌い」の指定は特になく、使用する楽譜については、出版社の指定や簡易伴奏、コード伴奏の可否などの記載はない。

②受験者の現状 受験者のレベルは年々低下している。以前は、初見も課題としていたが、近年ではそれができない現状にある。

③評価について 試験の結果だけで、ピアノのレベルを判定することは難しい。

④受験ルールの軽視、態度等の問題について

自分本位なルールの持ち出しや、受験者としての礼儀、試験であるにも関わらず、十分に練習されていなかったり、楽譜通りに弾かない受験者がいたりすること等が問題とされた。

### 3-1-1-3 (4)現場の課題及び(5)養成校の音楽教育に求めること

「問題解決に向かおうと努力すること」「これを持続させること」「チームワーク」など、学修や職業に対する基本的な姿勢が課題とされた。その他、楽譜や音源がない曲への取り組み、題材・教材の選択、園独自の活動に関わる苦勞、既成の教材からの発展応用的な活動、等の課題が報告された。

養成校の音楽教育に直接的に関わり、現場から求められることは、以下2点が口頭と資料で示された。

- ・保育現場では、ピアノの技術が必要である。
- ・季節の歌、わらべうた、手遊び等は、就職後即実践できるように指導して頂きたい。

### 3-1-2 養成校から

南九州大学と第一幼児教育短期大学は、科目展開とその内容や課題等を中心に説明がなされた。宮崎学園短期大学は、科目展開と内容・課題については資料提示のみで行い、授業内容を動画で紹介した。基礎、器楽演奏、表現、指導法でカリキュラムが構成されている点は各養成校に共通していた。器楽(ピアノ)の基礎技術習得を目指すための教材は、登録試験対策も兼ねて、各校ともバイエルが採用されていた。その他、現場実践を踏まえて生活や季節の歌の「弾き歌い」や手遊び等のレパートリーを身につけていくことも重要事項として位置づけられ、指導に多くの時間が費やされていることが報告された。

これらに加えて、総合的な表現や指導法に関わる各校の特色ある取り組みが紹介されると同時に、様々な方法でサポートしながら、学生の学びを支える必要性があること等が述べられた。各校が挙げた課題は以下の通りである。

南九州大学 人間発達学部 子ども教育学科

ピアノ実技は、初心者・既習者に拘らず、取り組み姿勢や自主練習の有無により在学期間に大きな差がつく。科目数(レッスン時間)を増やすことが難しいなか、学生のモチベーションを維持させ、一律に実技力を向上させていくことが課題である。さらに、学びの姿勢を整えるための生活指導の必要性も高い。養成機関としては、卒業段階でどれだけ資質能力を身につけさせるか、つまり質の保証を如何に実現するかが重要な視点となる。

## 第一幼児教育短期大学 幼児教育科

ピアノ習得年数に差があり、一斉授業での理解力には大きな差があり授業内容の設定が難しい。特に短大でピアノを始めた学生は苦手意識が強く、技術習得に困難さを感じる学生も多い。ピアノ初心者学生の、意欲的、主体的な音楽活動への参加が課題である。また、入学時において音楽体験、経験が少ない学生が多いため、音楽表現に関しては、表現することへの強い抵抗感を払拭し、表現力を育成することが課題である。

## 宮崎学園短期大学 保育科

学生のピアノ、音楽経験や習得状況に非常に大きな差がある。経験の少ない学生に対しては、ピアノを弾くことが好きになるようなレッスンが必要であり、経験豊かな学生には、実践的な応用(移調、即興など)まで指導したいと考える。選択科目を含めると、多くの教員・科目が「音学力」育成に関わることになる。最低限の音楽力の育成と、音楽の得意な学生の力を最大限に伸ばすための科目・教員間の連携と体制構築が課題である。

## 3・2 メインセッション

## &lt;テーマ1「私たちはこんな実践をしています」&gt;

最初に、研修参加者全員が、それぞれに現在実践している音楽に関わる取り組みを付箋に書き出した。模造紙は上下段に区切られ、上段に保育現場、下段に養成校の参加者たちが付箋を貼った。その結果、保育現場から19件、養成校から22件の取り組みが報告された。保育現場から報告された活動は、活動の種類でグループ化をした【表1】。養成校から提出された取り組みは、教育内容でグループ化をした【表2】。いずれも、必ずしも一つの概念で括られるものではないと思われるが、分析を統合して理論化するために、便宜的に取り組みと概念を一対一で対応させた。

【表1】

保育現場で実践している音楽に関わる活動	
歌唱	英語の歌を歌う
	わらべうた、季節の歌、行事の歌、生活の歌、その他の童謡
器楽	鍵盤奏
	楽器あそび(演奏)
	和太鼓
	竹太鼓
身体表現	マーチング
	バルーン、ポンポン
	手遊び
	身体表現(表現あそび)
	郷土芸能(踊り)
創作	リトミック
	地域交流で老人ホームの方と一緒にできる手遊び
鑑賞	廃材で楽器を作り曲を演奏する
	園児、職員に生の演奏を聴かせる
総合	パネルシアターでの音楽遊び
	音楽での劇遊び
音楽教育	音楽劇
	音楽担当の職員が0歳児からの音楽教育を行う

【表 2】

養成校で取り組んでいる教育内容	
ソルフェージュ	手で高さを表して音階を歌う
	音階ゲーム
	リズムまねっこ
コード奏、 コード奏ヴァリエーション	コードを歌って覚える
	主要三和音のコードフォーム習得
	伴奏アレンジ法を教える
技術の統合	様々な刺激を伴う遊び
	子どもの歌の遊び方研究
	歌いながら自己紹介
	ふしづくり
	歌と動きの融合
レパートリーの習得	季節の歌を歌う
	いつでもどこでも使える手遊び歌
	弾けるレパートリーを増やす
学びのサポート	少しでも出来たら思いきり褒める
	将来の目標に合わせて指導の仕方を考える
	素晴らしいアイデアを紹介
	練習の方法をアドバイス
	計画的に練習スケジュールを立てる
	練習できない理由を確認し時間割を見ながら時間の確保を一緒に考える
	なぜ弾けないのか本人との会話を通して原因を特定
	学生に合った指使いを一緒に考える

## &lt;テーマ2「子どもにさせたい音楽体験」&gt;

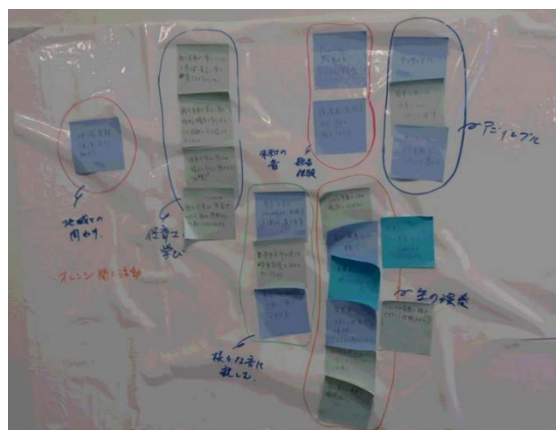
現場と養成校混合メンバーで構成する2グループに分かれ、ブレインストーミングの手順に従い、以下のようにセッションを進めた。

- ① メンバーがそれぞれに「子どもにさせたい音楽体験」を付箋に書き出した。
- ② 各メンバーがひとりずつ、付箋に書いたことについて説明をしながら、ホワイトボードシートに付箋を貼り付けた。
- ③ 貼りだされた付箋をグループ化して、見出しをつけた【写真1】【写真2】。

【写真1】



【写真2】



【表 3】

子どもにさせたい音楽体験
様々な音に触れる
よい音を聴く
動く
様々な体験をする
コミュニケーション遊び
イメージして創る
アンサンブル(声、身体、楽器、身近にあるもの)
生の演奏を聴く
地域との関わり

「子どもにさせたい音楽体験」として、2 グループ合わせて 53 件の具体的活動が提出された。それらから析出された概念(見出し)は【表 3】の通りである。以下、2 グループをひとまとめにして分析を進める。

続いて【表 3】を保育現場で実践するために、「保育者に求める力」について討議した結果 17 の力が挙げられた。これらに上位概念を貼り付けるために、挙げられた 17 の力を、一旦スキルとセンスに大別した。そして、再度 17 の力と照会しながら、スキルを「音楽の基礎知識、技術と保育実践のための応用力、子ども理解力」に、センスを「保育全般に関わる人間的資質」に置き換えた。また、自己研鑽はスキルとセンスを「統合化する努力」として別枠に位置付けた【表 4】。

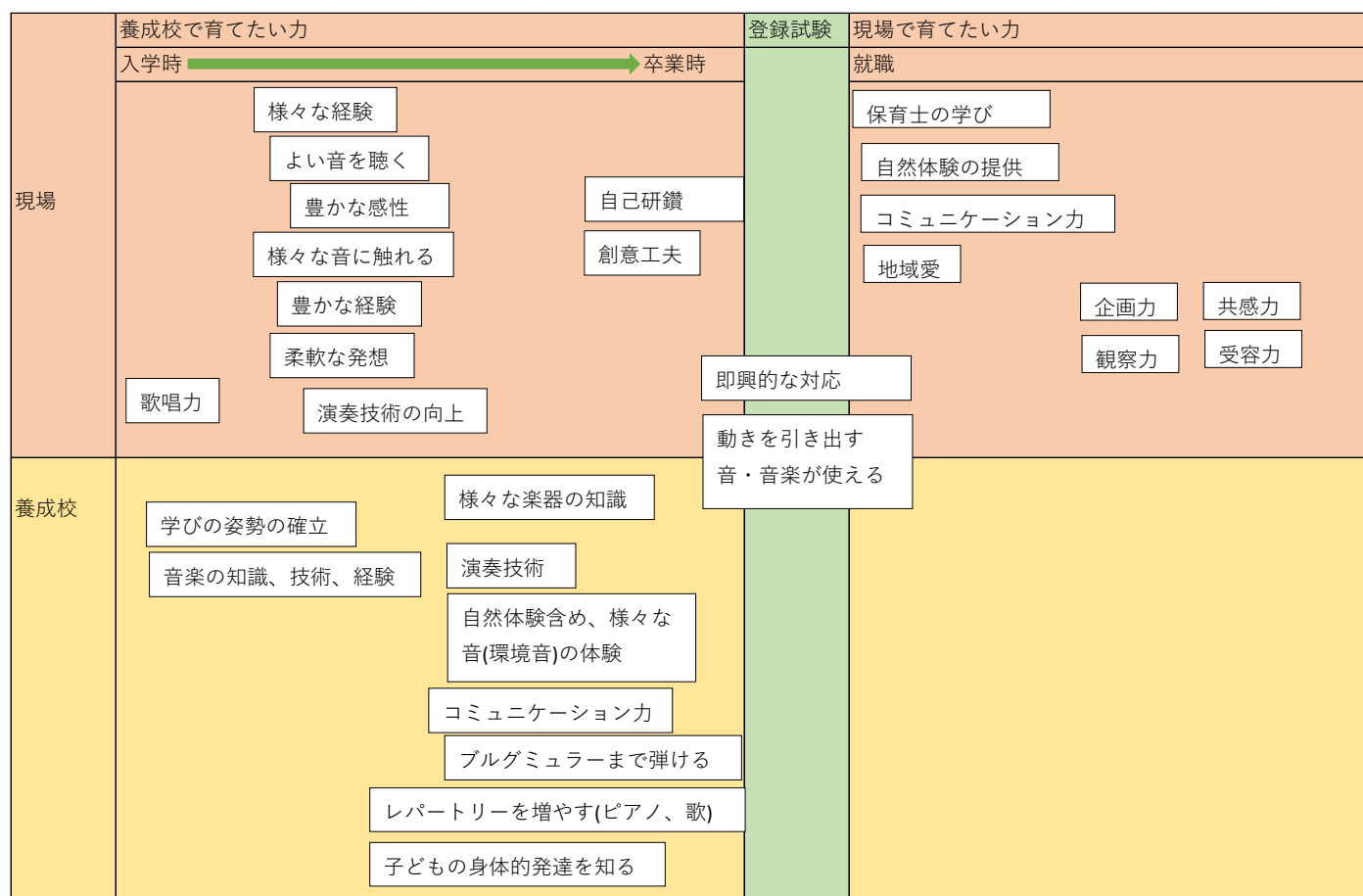
【表 4】

先生(保育者)に求める力		
演奏技術 歌唱力 動きを引き出す音・音楽を使える 即興的な対応力 教材を理解して応用する力 音楽の経験、知識、技術 子どもの身体的発達理解	スキル	音楽に直接関わる 基礎知識、技術、 保育実践のための 応用力と子ども理解
企画力 創意工夫 自然体験の提供 コミュニケーション力 観察力 共感力 受容力 豊かな感性、経験、発想 地域愛	センス	保育全般に関わる 人間的資質
自己研鑽		全てを統合化する 努力

最終セッションでは、「保育者に求められる音楽力を培う連携」を考えるためにその過程を視覚化した。保育者としての人間の資質も音楽活動の実践に必要な力として抽出された【表 4】ため、これらを含む「求められる力」が培われる過程を模造紙に貼りだした【図 3】。

企画では、現場と養成校がそれぞれの考えで、培われる過程を討議しながら、付箋を貼り出していく計画であったが、時間の関係で討議は十分ではなかった。また、付箋を貼る枠組みについては、申し合わせが十分ではなく、【図 3】に貼り出された付箋は、双方の考えが入り交ざっており、現場・養成校の縦軸は曖昧なものとなった。従って、【図 3】は分析を行わず、考察の参考資料とする。

【図 3】



### 3-2-2 2 次分析

保育者に求められる音楽力を培う連携を検討するために、S.1 と S.2 の繋がりを図式化した【図 4-1】～【図 4-3】。現場で実践される音楽に纏わる取り組みは、各園で特徴があり活動の内容も様々である。報告された様々な取り組みは、実践者の立場では必ずしも一つの概念で括することはできない。しかし「子どもにさせたい音楽体験」で挙げられた内容を概観すると、各園の実践のねらいがここにあり、一つひとつの活動に含まれる複数の意味合いが表れてくる。これを踏まえて「子どもにさせたい音楽体験」を、実践の「音楽表現の目的」に置き換えた。各セッションで討議された内容を「共通理解したいこと」としてセンターに位置付け、保育現場と養成校の各取り組みを上下に貼り付けた。

【図 4-1】保育現場

保育現場で実践している音楽に関わる活動	
歌唱	英語の歌を歌う わらべうた、季節の歌、行事の歌、生活の歌、その他の童謡
器楽	鍵盤奏 楽器あそび(演奏) 和太鼓 竹太鼓 マーチング
身体表現	バルーン、ポンポン 手遊び 身体表現(表現あそび) 郷土芸能(踊り) リトミック 地域交流で老人ホームの方と一緒にできる手遊び
創作	廃材で楽器を作り曲を演奏する
鑑賞	園児、職員に生の演奏を聴かせる パネルシアターでの音楽遊び
総合	音楽での劇遊び 音楽劇
音楽教育	音楽担当の職員が0歳児からの音楽教育を行う

【図 4-2】保育現場と養成校が共通理解したいこと

保育における音楽表現	音楽表現の目的	保育者に必要な力	
歌唱	様々な音に触れる よい音を聴く 動く 様々な体験をする コミュニケーション遊び イメージして創る アンサンブル (声、身体、楽器、身近にあるもの) 生の演奏を聴く 地域との関わり	演奏技術 歌唱力 動きを引き出す音・音楽を使える 即興的な対応力 教材を理解して応用する力 音楽の経験、知識、技術 子どもの身体的発達理解	音楽に直接関わる 基礎知識、技術、 保育実践のための 応用力と子ども理解
器楽		企画力 創意工夫 自然体験の提供 コミュニケーション力 観察力 共感力 受容力 豊かな感性、経験、発想 地域愛	保育全般に関わる 人間的資質
身体表現			
創作			
鑑賞			
総合表現			
音楽教育		自己研鑽	全てを統合化する 努力

【図 4-3】養成校

養成校で取り組んでいる教育内容	
ソルフェージュ	手で高さを表して音階を歌う 音階ゲーム リズムまねっこ
コード奏、 コード奏ヴァリエーション	コードを歌って覚える 主要三和音のコードフォーム習得 伴奏アレンジ法を教える
技術の統合	様々な刺激を伴う遊び 子どもの歌の遊び方研究 歌いながら自己紹介 ふしづくり 歌と動きの融合
レパートリーの習得	季節の歌を歌う いつでもどこでも使える手遊び歌 弾けるレパートリーを増やす
学びのサポート	少しでも出来たら思いきり褒める 将来の目標に合わせて指導の仕方を考える 素晴らしいアイデアを紹介 練習の方法をアドバイス 計画的に練習スケジュールを立てる 練習できない理由を確認し時間割を見ながら時間の確保を一緒に考える なぜ弾けないのか本人との会話を通して原因を特定 学生に合った指使いを一緒に考える

#### 4. 考察

本研究では、保育者に求められる音楽力をテーマに、それに対する保育現場と養成校の考え方やその育成のための取り組みの実態と課題を、アクティブラーニング型協働研修を通して明らかにした。その成果は、以下のようにまとめられる。

まず、保育現場での音楽活動および養成校での音楽教育の実態が明らかにされた。保育現場では、保育士が中心となり、あるいは外部講師や音楽専任職員などとの連携を通して様々な音楽活動が展開されていることが分かった。例えば、わらべうたや英語の歌などの歌唱活動、和太鼓や竹太鼓、マーチングなどの器楽活動、手遊びやリトミック、郷土芸能、またバルーンやボンボンを使った身体表現や廃材での手作り楽器製作、生演奏・パネルシアターの鑑賞活動に音楽劇などへの参加である。さらに地域住民との交流を通じた活動へと展開する例も報告された【図 4-1】。養成校の音楽教育では、保育現場で実践されているような手遊び歌や子どもの歌、リトミック、歌唱や合奏などの多様な保育技能の習得とともに、それらを支えるソルフェージュや鍵盤奏の技術指導、さらには学修へ向かう姿勢など学びのサポートに力を注いでいることも明らかになった【図 4-3】。

次に、保育現場が養成校に求める音楽教育について議論された。保育現場では養成校で培われた音楽力を基に音楽活動が展開され、養成校は保育現場で活かされることを前提とした音楽指導を行っていると言える。それゆえ、養成校は保育現場からの要望や要請に応じて指導内容を構成する必要もある。そこで、現場から養成校の音楽教育に求めることとして次の2点が挙げられた。ピアノ技術の習得、および季節の歌・わらべうた・手遊び等の実践力である(3-1-1-3)。これらは、3校ともに重要事項として位置付け、指導内容にも多くの時間を費やしているところである。それでも、養成校の課題として現場からの指摘を受けるということは、卒業時の音楽力が十分に確保されていない現状があることを意味していよう。それを裏付けるように、ピアノ技術の個人差が各養成校に共通する大きな課題となっており、一律に技術力を向上させることの難しさが報告されている(3-1-2)。この問題は、学生を取り巻く家庭や社会的環境の影響等の理解や、学生への教育方法や対応の仕方の見直しを迫るものと言える。

さらに、保育現場が実施している保育士登録試験のピアノ実技試験についても説明がなされた。この登録試験を特徴づけ、受験者が最も苦戦していると言えるのが、試験課題曲のバイエル 80 番～100 番(数曲を除く)である。養成校の実感と同様に、現場からも受験者のレベルが年々低下していることが確認されている一方で、課題曲は数十年前から変更されておらず難易度が高いままになっており、実態との乖離が起こっていると見られる。これは、養成校においては、実践を支える音楽基礎力の定着を図るための指導法、現場においては登録試験の目的・手段の再検討等、両者の課題を示唆する現状であると思われる。

最後に、現場と養成校ともに保育者に必要な力についての考察を行った【図 4-2】。保育者に必要な力として挙げられた多くの具体的事項は「音楽力」と「保育者としての資質」に大別できよう。前者については、主に養成校でその基礎力と実践力を育成し、保育現場で応用力を磨いていくべきであろう。後者については、養成校での音楽を含む様々な教育内容、および保育現場での実務経験を通して本人の自覚の上に主体的に身につけていく種類のものと言える。

以上のように、協働研修は、保育現場と養成校それぞれにおける「音楽力をめぐる現状と課題」を、直接理解し共有する契機となった。また、「実践力向上」や「学びなおし」など、養成校が担っている地域貢献(p.2 【図 1】)等も含め、今後互いの情報交換や連携を行いながら保育者養成と資質向上に取り組ん

でいける部分も見えてきたのではないだろうか。この協働研修を契機として、ともに保育者の音楽力の確保と向上という課題を共有しながら連携し、音楽力を備えた魅力的な保育者育成に臨んで行くことが期待される。

## 謝辞

本研究チームが主催しました研修にご参加くださり、現場実践のご報告と養成校の音楽教育に対する貴重なご意見を下さった先生方に深謝いたします。

## 付記

本研究は、一般社団法人全国保育者養成協議会 2018 年度ブロック研究助成事業によるものである。

## 【資料 1】

(1) 保育者に求める音楽力について	
得意なことを生かしてほしい アカペラで歌ってもよい 既成曲ではなく、創作でもよい 苦手でも先生が努力して弾いた曲には、子どもたちが耳を傾ける 養成校で学んだことを保育に取り入れて欲しい	得意なことを生かす できることで工夫する 学んだことを生かす
ピアノレッスンの機会を設けている 実習生が上手く弾けなくても焦らせない 弾ける曲が1曲でもあれば、弾いてもらう。1曲でも弾ければよい。 ピアノを全く弾かない保育士にも努力して欲しいが、ピアノ一色にはできない ピアノが苦手な保育士をどう伸ばすかが課題である	園からのサポート   課題
(2) 保育における音楽・各園の取り組み	
ピアノが全てではない。日常保育の中で音楽に親しみ、楽しむことが目的である 関心、興味が持てるように(子どもが)心がけている 音楽が子どもたちの成長の一つの手助けになればとの想い 音楽を楽しむことで、小・中学校の音楽の時間が苦痛でなくなることを望む	理念、目的
生活の歌、季節の歌、行事の歌、その他の童謡を歌う 歌を身体表現と共に楽しむ 登園後の朝の音楽、園庭遊びや活動中に音楽を流す 様々な楽器に触れる 効果音を用いた身体表現、CDを用いた絵本、読み聞かせ 自然体験の中で音を取り上げる 打楽器 バルーン、ポンポン、マーチング、カラーガード 夏祭りの盆踊り、竹太鼓、和太鼓 音楽表現を取り入れた音楽遊び 運動会や発表会に向けて 郷土芸能を取り入れている 老人ホームの敬老会、クリスマス会に訪問し、日本太鼓、合唱、手遊びを披露したり、一緒に遊んだりしている 0歳児からのリトミック 目標をたてて(運動会、発表会に向けて)、音楽表現活動に取り組む 毎月の中で一週間を音楽の週と位置付けると、他領域とのバランスが取れる マーチングのカラーガードは、外部講師の指導による 音楽専門の職員が、リトミックを指導する リトミックの年間計画を立て、週案、日案を作成している 職員が音楽担当職員と話し合い、音楽教室の流れで指導 園行事では、職員が順番に歌の伴奏を担当する(すべての職員に機会を設ける) 音楽に関する講習会等には、積極的に参加する 行事の音楽に関する事で、日々の取り組みの結果が出せている	内容 ・日常保育 ・行事 ・園外保育 ・園の特徴的な活動
	指導形態 計画的な取り組み 外部講師 音楽専門の職員
	資質向上のサポート
	成果

- 
- <sup>1</sup> 三宅 浩子 伊藤 圭子(2013) 「音楽基礎力と保育実践を繋ぐ「音楽」指導(1)」『第 52 回研究発表  
論文集』全国保育者養成協議会 pp.262～263
  - <sup>2</sup> 中池 順子(2017) 「保育者養成におけるピアノ技術指導の改善～指トレーニングの導入～」『第一幼  
児教育短期大学紀要第 11 号』pp.29-41
  - <sup>3</sup> 早川 純子(2017) 「ピアノ表現力向上のための楽曲分析―還元分析による試み―」『全国大学音楽  
教育学会研究紀要第 27 号』全国大学音楽教育学会 pp.22-20
  - <sup>4</sup> 赤井 裕美(2016) 「ピアノを中心とした「保育音楽力」の在り方と養成校の音楽授業に関する考  
察」『湘北紀要(37)』pp.27-40
  - <sup>5</sup> 榎内 光子 他(2010) 「保育音楽の現場実践力の向上を目指して―養成校の試行―」『徳島文理大学  
研究紀要第 80 号』pp.7-15
  - <sup>6</sup> 大野 恵美 他(2013) 「保育現場の音楽表現活動の実態と短大教育の在り方に関する研究―保育者  
養成校における音楽教育―」『湘北紀要(34)』pp.1-29